

3/13 WED  
13:00  
↓  
16:00

九州大学 日本ジョナサン・KS・  
チョイ文化館 中山ホール

対面開催 同時通訳付き 参加費無料



要参加申込み  
← 参加お申込みはこちらから  
申込切: 3月10日(日)

共催: 九州大学大学院人文科学研究院/一般財団法人人文情報学研究所  
協力: ROIS-DS人文科学オープンデータ共同利用センター/国立情報学研究所/  
九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻

DH 国際シンポジウム

# 接続する 人文学

様々な社会課題を解決するために、人文学は連携する必要がある。そのためには人文情報学の手法は有効である。本シンポジウムでは、両講演者の専門である大規模テキストデータの構築と分析に関する事例を皮切りに、討論者を交えて最新の人文情報学の動向と、新設予定の人文情報連係学府(仮)の教育に関して討論する。

総司会 夏目宗幸  
九州大学大学院人文科学研究院  
開会あいさつ 上山あゆみ  
九州大学大学院人文科学研究院院長  
趣旨説明 中川奈津子  
九州大学大学院人文科学研究院  
講演① J. Stephen Downie  
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校  
講演② Ted Underwood  
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校

パネルディスカッション(同時通訳あり)

ファシリテーター 中川奈津子  
九州大学大学院人文科学研究院  
登壇者 J. Stephen Downie  
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校  
Ted Underwood  
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校  
北本朝展  
ROIS-DS人文科学オープンデータ共同利用センター/  
国立情報学研究所  
永崎研宣  
一般財団法人人文情報学研究所  
閉会あいさつ 上山あゆみ  
九州大学大学院人文科学研究院院長

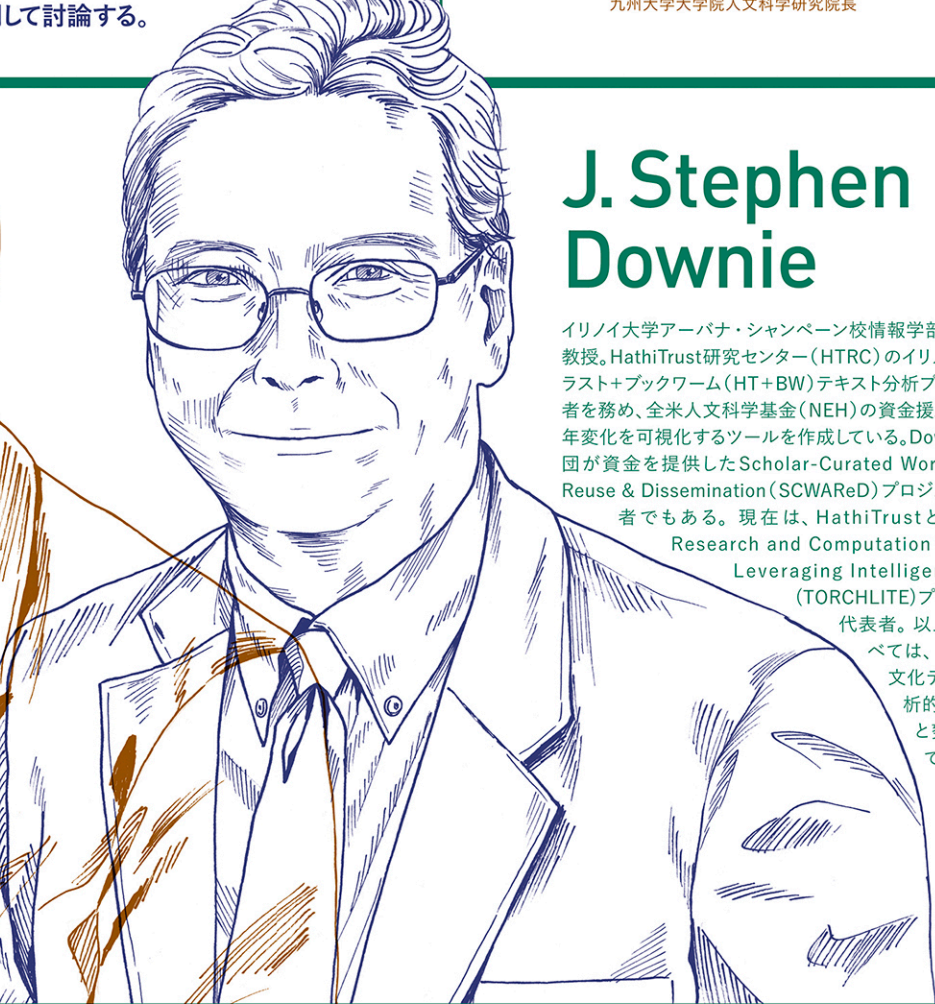
## Ted Underwood

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校情報学部及び教養学部英文学教授。18~19世紀の文学について、馴染みのある批評的手法で解説した2冊の本を執筆した後、大規模なデジタル・ライブラリーがもたらす新たな可能性に着目。それ以来、彼の研究は、何百冊、何千冊という本を一度に検討する際に、長い時間軸の中で見えてくる文学のパターンを探求してきた。例えば最近では、機械学習を利用して、探偵小説とSFが別個のジャンルとして統合された過程を追跡したり、1780年から現在に至るまで、文学の人物描写の中で明らかになったジェンダーに関する思い込みの移り変わりを説明したりしている。文学史に関する著書に『遠い地平線 Distant Horizons』(シカゴ大学出版局、2019年)、『なぜ文学の時代区分は重要だったのか: 歴史的対比と英語研究の威信』(スタンフォード大学出版局、2013年)、『太陽の仕事: 文学、科学、政治経済 1760-1860』(New York: Palgrave, 2005)がある。



## J. Stephen Downie

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校情報学部研究担当副学部長・教授。HathiTrust研究センター(HTRC)のイリノイ共同所長。ハテイトラスト+ブックワーム(HT+BW)テキスト分析プロジェクトの研究代表者を務め、全米人文科学基金(NEH)の資金援助を受けて、用語の経年変化を可視化するツールを作成している。Downie教授は、メロン財団が資金を提供したScholar-Curated Worksets for Analysis, Reuse & Dissemination(SCWAReD)プロジェクトの共同研究代表者でもある。現在は、HathiTrustとのTools for Open Research and Computationの共同研究代表者: Leveraging Intelligent Text Extraction (TORCHLITE)プロジェクトの共同研究代表者。以上のプロジェクトのすべては、著作権で制限された文化データへの大規模な分析的アクセスを提供しようと努力しているという点で共通するものである。



3/15 FRI  
13:00  
↓  
18:00

一橋講堂 (千代田区一ツ橋)

対面開催 同時通訳付き 参加費無料



要参加申込み  
← 参加お申込みはこちらから

「機械学習時代に  
変わりゆく文学をつかまえること」  
Ted Underwood

文学を量的に分析しようというのはなにも新しい思いつきではない。二〇世紀初頭より(英国でも日本でも)文学研究者が度々手を出してきたものだ。だが二〇世紀に測れたのは語彙頻度や文の長さであり、かならずしも明確な文学的意義に結びつかないものだった。機械学習の登場で状況は一変した。たんに分析規模が拡大したからではない。読者にとってもと意義がある事象を測れるようになったからだ。たとえば語りの速度、登場人物のジェンダー・ロールのようなものだ。本講演では、機械学習をどう用いれば、小説のそういった側面が浮き彫りになるかだけでなく、文学の変化にまで敷衍できるのかをお示しする。また、生成AIをつかって私たちが取り組みはじめた新たな問題についても紹介したい。

共催: 九州大学大学院人文科学研究院/一般財団法人人文情報学研究所

DH 国際シンポジウム

# ビッグデータ時代の 文学研究と 研究基盤

1000万冊以上のデジタル化資料を提供するHathiTrust デジタルライブラリーに象徴されるように、人文学の研究対象たる資料は人がすべてに目を通すことは不可能な状況となって久しい。このような状況では、膨大な資料のすべてを読むことなく、しかし人が読める量を凌駕する大量の資料を対象として妥当な研究を行う手法が求められつつある。「遠読(Distant Reading)」は、まさにそれに取り組む文学研究の手法として提唱され、徐々に国際的に広がってきている。そして、北米ではそれを支援するための研究データ基盤としてのHathiTrust研究センターが各地の研究者に活用されるようになってきている。本シンポジウムでは、イリノイ大学より、この課題に取り組む文学研究者Ted Underwood教授、及びその研究基盤を提供するHathiTrust研究センター共同所長のJ. Stephen Downie教授を招聘し、そのような状況に日本の人文学研究がどう対応し得るか登壇者・参加者の皆様と検討する機会としたい。

総司会 中川奈津子  
九州大学大学院人文科学研究院  
開会挨拶 上山あゆみ  
九州大学大学院人文科学研究院院長

第一部 ビッグデータ・文学研究・日本での可能性

司会 橋本健広  
中央大学国際情報学部  
基調講演① 「機械学習時代に変わりゆく文学をつかまえること」  
Ted Underwood  
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校  
講演 「「遠読」を譯す——本邦における人文学的知のインフラの整備をめぐる」  
秋草俊一郎  
日本大学大学院総合社会情報研究科  
講演 「ユーザ視点のデジタル・ヒューマニティーズ——研究、教育、アウトリーチ」  
北村紗衣  
武蔵大学人文学部

第二部 デジタル研究基盤と文学研究

司会 永崎研宣  
一般財団法人人文情報学研究所  
基調講演② 「研究者がキュレーションした分析、再利用、普及のためのワークセット(SCWAReD)プロジェクト」  
J. Stephen Downie  
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校  
講演① 「研究データの活用に向けた九州大学における試み」  
石田栄美  
九州大学データ駆動イノベーション推進本部  
講演② 「デジタル×文学研究に期待/妄想すること」  
川平敏文  
九州大学大学院人文科学研究院  
講演③ 「研究・教育ツールとしての日本デジタル文学地図」  
飯倉洋一  
大阪大学大学院人文研究科

総合ディスカッション

司会 中川奈津子  
九州大学大学院人文科学研究院  
閉会あいさつ 下田正弘  
武蔵野大学教授/一般財団法人人文情報学研究所代表理事